

2000年 夏号

# WVA!

VOL. 3

L'hôpital KYOWA



## 第3回 共和病院地域医療シンポジウム

医療法人共和会では、平成10年より地域の行政・福祉・医療の関連各機関および当会のスタッフを対象として共和病院地域医療シンポジウムを開催し、今回で第3回と回を重ねてまいりました。

まず、開会を前に榎本和院長にこのシンポジウムの目的について伺いました。

「共和病院では、当初から地域に関かれた病院をテーマにさまざまな取り組みを行ってきました。

このシンポジウムは、当院の取り組みを外部の方に紹介し、理解を深めてもらうことをひとつの目的にしています。

また、関連関係機関の方たちとの連携し、情報を交換して、医療・看護技術のレベルアップをはかることも大きな目的です。」



TOPICS・EVENT  
第3回 共和病院地域医療シンポジウム →

## 第3回 共和病院地域医療 シンポジウムに 参加して

精神障害を持つ方たちの社会復帰と自立をいかに進めていくか、また、今、現場ではどのような課題を抱え、どう取り組んでいるのか。今回は5月20日(土)、大府市勤労文化会館で開かれた「第3回 共和病院地域医療シンポジウム」でのお話を中心にこの課題を考えてみたいと思います。



シンポジウムは、加藤仁理事長のあいさつに続き、第1部として、社会福祉法人『上越つくしの里医療福祉協会』の青木美代子先生が「精神障害者社会復帰活動の実際つくしの里の取り組みから」というテーマでお話をされました。『つくしの里』(新潟県)は、授産施設と生活支援センター、グループホーム、作業所など7つの施設を持ち、早くから精神障害者の社会復帰や生活支援、相談援助などに取り組んできました。講演で青木先生は、設立から現在までの歩みを紹介しながら、施設の運営では、利用者(精神障害者や家族)にきちんと情報を公開し、利用者にも運営に参加してもらうこと。地域から孤立しないで活動を地域に発信し、交流、協力しあうこと。職員の援助技術を向上させ質の高いサービスを提供すること。などを強調されました。いずれも先生の永年の経験から導き出された重要なポイントだと思えます。

シンポジウムの第2部は、共和病院、訪問看護ステーション『ソレイユ』、社会福祉法人『憩いの郷』のそれぞれの担当者から日頃の活動の報告がありました。トップバッターは、共和病院の看護スタッフが「老年期閉鎖病棟におけるQOLの向上をめざして」というテーマで、自分たちが看護に当たった方を例に患者さんの抑制廃止にいかに至ったかを報告しました。70歳代の男性で精神病による妄想や幻聴などがあり、危険行為を防ぐために抑制が行わ



れていました。その方の趣味であった油絵などを治療に使うことでいかに抑制を止め自立させていったかが詳しく発表されました。発表では、患者さんの欲求に合わせた看護の大切さが指摘されました。なお、老年期病棟では、現在は抑制は全廃しています。

次に発表した開放病棟の看護スタッフからは、「アパート退院した長期入院患者への援助」をテーマに、二人の女性が病院を退院してアパートで共同生活を送るようになるまでの看護の様子を報告しました。二人の金銭管理から食生活、交通機関の利用など日々の生活で出てきた問題点をどのように看護スタッフが援助していったかがスライドなどを使って報告されました。アパート退院は、患者さんの社会復帰のひとつの手段として注目される取り組みではないでしょうか。後半は、訪問看護ステーション『ソレイユ』の看護婦さんたちの「開設6ヶ月の歩み」と、『憩いの郷』のソ

ーシャルワーカーさんたちの「通所授産施設・生活支援センターのめざすもの」という発表がありました。この中では、それまでほとんど他人に対して反応を示さなかった70歳代の男性が、ソレイユの看護婦さんたちの看護によって少しずつ心を開いていったというお話が印象的でした。改めて看護や家族の協力の大切さが認識させられました。

いずれの発表に対しても場内から質問や感想などが寄せられ、テー

マに対する関心の高さを実感しました。

精神障害を持つ方たちの社会復帰は、一病院や一施設だけの取り



裏方さんも頑張りました。

組みでは限界があります。最近では障害を持つ方たちへの地域での意識・関心は高まってきていますが、残念ながら完全なバリアフリーとまではいかないのも現状のようです。さらなるバリアフリーに向けて、今回のシンポジウムのように、外に向かって情報を積極的に公開し、地域と協力し、障害を持つ方たちの社会復帰と自立、社会参加のために努力していただきたいと思います。(取材者 大橋)

## 共和軟式野球チーム 永遠なれ



私が病院に入職した頃は、男子職員が名誉院長を含めても十名ほどであった。時代は流れ、現在は当時と比べて男子職員も飛躍的に増え、隔世の感がある。多くの若い男子職員は、体力を持って余しムズムズしていた。そんな折り愛精協軟式野球大会の通知が当院にも届いた。是非参加してみたいとの気運が高まったが、我々には公式チームもなく、無論ユニホームもない、そんな窮地に理事長が全面的に理解を示してくれ、ユニホームと道具一式を提供してくれた。我々に舞台は整った。

今年5月4日、初の公式大会！試合に向けての特別練習は一度も無かったが、初戦は強豪K病院を、チームワークと相手エースの我がチームの底知れぬチーム力を恐れてか(?)デッドボールの連発と監督の名采配と、若手のホープ新美君の逆転サヨナラ満塁ホームランで劇的勝利。二試合目は古豪M病院を実力で圧倒し勝利をものにした。この大会が終わった後は、練習試合の申し込みも数件あったらしい。

職員チームも他の病院に存在を示したが、患者様のソフトボールチームは大会にて毎年、優勝、準優勝を繰り返し県下に知られた強豪チームである。私は、これからもこれらの良き仲間と汗と涙と感動を共に燃え尽きるまで頑張りたいと思っています。 柳田 博志



### 編集後記

広報誌「WAI!」夏号いかがでしたでしょうか。今回は「第3回共和病院地域医療シンポジウム」をメインに取り上げ、地域と自立の関係を考えてみました。それからVol.3ともなると、皆さんそれぞれに気になるコーナーができて、読まれる順番があるんじゃないでしょうか。もしかして「編集後記が気になる」なんて方がいらしたら、その為にだけ「よかったことさかし」の取材旅行でもしてみたい気分です(もちろんポケットマネーで)。



## 子育て ノウハウ

～お母さんは子どもの心の基地～

**赤ちゃん**は9ヶ月くらいになると、お母さんとの間に情緒の交流をはじめます。同時に外の世界への興味・関心が高まり、他の子どもとの交流も始まります。母親から離れ探索を始めますが、時々、お母さんが居るか、居ないか確かめ、居ないことに気づくと不安になりどうしていいのかわからなくなります。この時期にお母さんが子どもの微妙な心の変化に気づかず子どもを置いて外に長く出かけたたり、黙って子どもの前から消えたりすることにより不安が高まるといわれています。しかし2歳頃になると「イナイイナイ、バァ～」を遊びとして受け入れ、短時間の母親の不在に耐えることができ、父親とも関わることができるようになります。そして3歳までにはお母さんが居なくても長時間遊ぶことの出来る力を身につけます。また自己調節能力が生まれお母さんの良い面と、悪い面を統合した形、例えばお母さんが自分の欲求の全てを受け入れる万能なものではないと受け止めることも可能になります。しかし母親が子どもに依存し外界との交流や母親以外の人々との交流を妨げると結果的には自我能力が育たず、子ども自身も安定した気持ちで生活することが出来なくなり、ますます母親への依存が強まります。しかし「ほどよい関係」を保つことにより子どもと母親の揺るぎない関わりができ「自分と母親はひとつの者ではない、別の個体である」との認識が生まれます。これらの事から子どもの心理学の専門家達が『お母さんは子どもの心の基地』と述べているのです。大きくなるにつれ、お母さんが外へ出て「すぐに戻ってくる。大丈夫」と子どもが親をあてにし、母親は子どもに対して「好きなおもちゃのところへ行ったり、公園で母から離れて少し遠くに行っても母のところに戻ってくる」とあてに出来るようになります。こうした母子の恒常的な関係ができあがると、お母さんから分離した別人格の『個』として外の世界へと踏み出すことが出来ます。言い換えれば3歳までにお母さんが『子どもの基地』となり安心感を培うことが大切であると言えます。 院長 榎本 和

ところで2歳のわが娘から、日頃の生活の中でいろいろ教えられることがあります。とくに思うのは、何事に対しても吸収しようと前向きに行動していることです。もちろん喜怒哀楽ははっきりしていますが、私が忘れていたものを彼女の行動が叱ってくれているような気がします。向い風に対しても、とばされないよう前進!前進!! それでは秋の気配が感じられる頃に再会しましょう。

# 食中毒

いよいよ夏本番です。毎年この季節に注意を要するのが食中毒です。

食中毒は、昔は「食傷」あるいは「食あたり」と言われ、生活環境と衛生知識の低さや食料不足から、汚染したものの、腐敗したものを食し夏場に多発したものです。最近において、衛生状態が改善したにもかかわらず発生件数は増加しているのが現状です。

人体に有毒な細菌や物質を含んだ食品を摂取することにより発生する消化管を主体とした疾病を総称して食中毒といいます。現在、細菌性食中毒の起因菌として認定されている菌は、腸炎ピリオ、サルモネラ菌、病原性大腸菌、ブドウ球菌、ボツリヌス菌、ウエルシ菌、カンピロバクターなど15種類にのぼります。今回は日本において頻度の高い「腸炎ピリオ」と、数年前に大流行して以来有名な大腸菌となった「O157」を取り上げてみます。

\*

**【腸炎ピリオ】**腸炎ピリオ菌による食中毒は、サルモネラ菌に次いで多く、食中毒の1/3を占めます。ピリオ菌は海底の泥や魚介類に好んで住む菌です。そのため生の魚介類を好んで食する生活習慣をもつ日本において多く見られます。ピリオ菌は塩分と温暖な環境を好み、20℃以上になると活発に増殖を始め、6～10分で約2倍に増えます（一般の細菌は2倍に増えるのに30分～1時間かかります）。原因となる食べ物を食べてから症状が現れるまで（潜伏期）は、3～40時間と一定ではありませんが、潜伏期が短いほど重症化する傾向があります。

予防のポイントは

**魚介類はよく水洗いする...菌は真水に弱く、調理前によく水で洗い、菌を洗い流し殺菌します。**

低温で保存し、なるべく早く食べる...買った食品はすぐに冷蔵庫に入れて菌の増殖を抑えます。加熱調理する...菌は熱に弱く、加熱により容易に死滅します。

調理器具を消毒する...魚介類を調理した後のまな板や包丁、ふきんなどは熱湯や洗剤で十分に消毒します。

\*

**【O157】**O157は牛の腸に住む大腸菌の一種です。牛には影響を与えませんが、人に感染すると3～7日の潜伏期を経て症状を現します。まれに「ペロ毒素」という毒素が腎臓を傷害し「溶血性尿毒症候群（HUS）」を引き起こし、時に命にかかわることもあります。

O157の感染力は大変強く、他の菌が数万～数百万個で症状を起こすのに対し、50個くらいの菌が体内に入るだけで症状を起こします。このため人から人への「二次感染」が多く、家族内感染がかなりの率で見られます。

予防のポイントは

**食品はよく加熱する...75℃以上で1分間加熱することを提唱します。生肉の摂取は控えます。感染者の便の扱いに注意...必ず便捨ての手袋を用い処理後は丁寧に手を洗います。**

食中毒を防ぐためのポイントは

病原菌を付けない...食品をよく洗う

病原菌を増やさない...食品を冷蔵庫で保存、早く食べる

病原菌を殺す...食品を高温で加熱調理するの3つになります。

私たちの食卓に上る食品は、様々な経路を経て届けられます。食品の安全性を過信せず、自分の力で病原菌から身を守りましょう。



L'hôpital  
KYOWA

共和会理念・基本方針

『優しい医療・楽しい職場』

私たちが目指す『優しい医療』とは！  
患者様に安心と満足を提供する医療良質且つ効率的な医療の提供  
患者様へのサービスの充実

私たちが目指す『楽しい職場』とは！  
毎日の出勤が楽しくなる職場  
職員のレベルアップと仕事の充実が感じられる職場  
職員の満足が患者様へ反映される職場

## 当院をご利用の皆様へ

わたたくしたちは、利用者の皆さんへより良い医療をやさしく安全に提供し、納得のいく医療を受けていただくために努力しています。それには利用者の皆さんと医療者の意志の疎通が最も重要であると考えます。これを実現するために、わたしたちは思いやりのある、人格を尊重した医療を提供するとともに、以下のような医療を目指しています。

1. あなたは、個人的な背景の違いや病気の性質などにかかわらず、必要な医療を受けることができます。
2. あなたは、医療の内容、その危険性および回復の可能性についてあなたが理解できる言葉で説明を受け、それを十分納得して同意したのちに、医療を受けることができます。ただし、必要に応じて主治医の判断によってご家族、代理の方にお話をする場合もあります。
3. あなたは、今受けている治療、処置、検査、看護・介護、食事その他についてご自分の希望を申し出ることができます。また、他の医療機関に転院したい場合は、必要な情報を提供致します。
4. あなたの医療上の個人情報保護されます。

病院長 榎本 和



医療法人 共和会 **共和病院**

愛知県大府市梶田町2-123

TEL.0562-46-2222(代)

URL <http://www.kyowa.or.jp/>

## 俳句コーナー

特島

廁半ばに

出かねたり

漱石

名譽院長  
加藤 邦之助

あまりにも有名な句であります。佳句といえませんが、明治四十年六月十七日から十九日の三日間にわたって時の総理大臣の西園寺公望が神田駿河台の私邸に有名文人を招待した雨声会への欠席の返書に添えた句だったのでした。その時、奥さん鏡子さんの妹婿が、相手は西園寺さんですよ。葉書で返事はあまりひどくないですかと。したら漱石は平気で「これで用が足りるんだから充分だ」といってさうです。その後の雨声会も毎回欠席しています。招待された人は十七名、泉鏡花、巖谷小波、國木田独步、幸田露伴、島崎藤村、田山花袋、徳田秋声、川上眉山、森鷗外、広津柳浪等三流文人達、出席辞退したのは坪内逍遙、二葉亭四迷と漱石との三人でした。その四年後、明治四十四年一月には文学博士号も辞退しています。これを見て漱石という人は権威とか型式に異常なほど反発した性格のように考えられます。二つした事情で有名な句になっていますが、当時は「虞美人草」の執筆中で朝日新聞に連載される時、虞美人草の宣伝にも利用された様にも思われます。もう一度この句をよみ直してください。いかにも江戸っ子の気分の好きが皮肉なぶりに伝わってきます。